



# 自分を問い直すことで より良いつながりが 生まれる

アタシ社「たたみかた」編集長  
三根かよこ氏



——逗子の夫婦出版社「アタシ社」。ユニークな社名とエッジの効いた発行物が高評価ですね。

「私」一人で世界は変わらないけれど、「アタシ」がどう見るかで世界は変わるかもしれない。そんな思いから2015年に夫婦で出版社を始めました。以来、元美容師の夫と「髪とアタシ」という美容文芸誌を発行し、今春から新たに「30代のための新しい社会文芸誌」と冠した「たたみかた」を創刊しました。私自身が今年31歳で、社会では「無関心層」と揶揄されつつも多様な動きがある世代ですし、他世代にも「あなたが30代のときはどうでしたか？」と呼びかける意味で「30代の」としました。たたみかたは「広がりすぎたものを整えて次の人が使えるように」というニュアンスです。たたんでいく中で形は変わっても、何も失っていない、という暗喩でもあります。

いま、私たちがどれほど未来をより



「たたみかた」創刊号。「我が事で語ることができ」テーマを特集し年2回程発行予定。

良いものにしたいと希求しても、良くなっている実感は持ちにくく、むしろ様々な課題が重層的に広がっている現実があります。でも、これらをひとつずつクリアしていくことでしか前に進めませんよね。とはいえ自分が直接つながらない課題には興味が持ちにくいのもわかる。自身との関係性を越えて「アタシの課題」だと思ふための思考プロセスを多面的に追おうとしたのが「たたみかた」です。

——「たたみかた」の創刊号は福島特集で反響も大きいようですが。

そもそも雑誌を作ろうと思ったきっかけが東日本大震災と福島原発事故でした。何が正しく、何が正しくないのか、より正確な情報を求めても何かが違う。私が思う正しさは、誰かにとっては正しくないかもしれない。ならば、完全には無理でも自分をできる限り純化し、ジブリ映画「もののけ姫」で言うところの「曇りなき眼で見定める」作業が必要かなと（笑）。そこで、「たたみかた」福島特集の前半は、福島を追い続ける報道記者やTVディレクターといった発信する側のインタビューで構成し、後半は哲学者の桑子敏雄先生の寄稿や曹洞宗僧侶の藤田一照さん、ソマリアで活動する永井陽右さんにインタビューし、ある種の実存主義的な境地を垣間見たように思います。それらの文芸作品で読者にゆさぶりをかけ、

各々ができる役割につながったらいい。でも、それはあくまで個人的なこと。自分の役割と他者の役割は違う。そこに「生きる意味」を感じます。

——もともとは広告媒体の制作に関わっていた三根さんですが「たたみかた」の発行でご自身に変化は。

かつては、世俗的なものを当たり前が良いと思っていましたが、性格的になんでも深く考える傾向はありました。答えのない問題を見続けられる胆力を養うことで、何かを解決しようとしたときに、A案とB案でぶつかるのではなく、それまで見えていなかったC案が見つかるかもしれません。

私は社会活動家でも学術有識者でもないの、逆に仕切りがないのが強みかもしれません。「たたみかた」を通じて、自助を高めた先に公助が動き出すまでを伴走し続けたいと思っています。

[聞き手：つな環編集部]

### 三根かよこ (みね かよこ)

1986年千葉県出身、バンクーバーで8歳まで暮らす。株式会社リクルートホールディングスにてプライダル情報誌のディレクターを6年経験。同社在職中に桑沢デザイン研究所にてビジュアルデザインを学び、退職後に神奈川県逗子にて夫婦出版「アタシ」社設立後は、企業のオウンドメディア、広告、書籍、CDジャケットといった多様なクリエイティブをワンストップで制作。